

ピースおおさか 展示リニューアル構想

～大阪空襲犠牲者追悼の場、平和学習の場としてさらなる飛躍を！～

はじめに

財団法人大阪国際平和センターは、戦争と平和に関する情報・資料の収集・保存・展示を行うとともに、平和問題に関する調査研究・学習・普及等を図ることによって、戦争の悲惨さを次世代に伝え、平和の尊さを訴え、平和の首都大阪の実現を目指し、世界平和に貢献することを目的に、平成元年7月、大阪府・大阪市の共同出捐により設立された。

そして、これら財団の目的を実現するための基幹事業として、府市の補助により、大阪国際平和センター(ピースおおさか)を平成3年9月に開館した。

以降、ピースおおさかは、「大阪府民・市民と国内外の人々との間の相互交流を深めることを通じて、大阪が世界の平和と繁栄に積極的に貢献する」という設置理念に基づき、常設展示や企画事業及び研究活動、また、ビデオや展示パネルの貸出し等を通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え続け、総入館者数は170万を超えている。

1. 基本的考え方

(1) 展示リニューアルの必要性

戦後67年が経過し、戦後生まれが総人口の3/4を占めるようになり、自らの経験として戦争を語れる人はますます少なくなっている。戦争の記憶を風化させることなく、次代を担う子どもたちに戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えていくために、ピースおおさかの果たす役割が一層重要になってきている。

しかしながら、ピースおおさかは開館以来22年、常設展示のリニューアルがなされないまま現在に至っている。そのため、近年における歴史研究の進展に照らして展示内容や説明文に変更が必要なものや、より分かりやすい展示物への変更が望ましいものも生じており、また、一部展示物の劣化や装置機器類の陳腐化が進んでいる。

展示については、開館当時から、「加害と被害の両面を展示」と評価する声がある一方、「残酷」「偏向」「自虐的」といった批判もある。また、事実に対し不適切との指摘を受け、展示資料の撤去、差替え、説明文変更等を数回行っている。

そして、開館当初の予想以上に小中学生の入館者が増え、入館者の6～7割を占めるようになっており、子どもたちの平和学習施設として一定定着しているが、開館当時の展示や説明、見せ方、展示構成等は、小中学生には難しいものも多く、彼らに戦争の悲惨さ・平和の尊さをいかに分かりやすく伝えるか、という観点での見直しが必要である。

このようなことから、ピースおおさかが引き続き、府内外において存在価値を発揮するとともに府市の平和施策の一翼を担うためには抜本的な展示リニューアルが必要、と判断するに至ったものである。

(2) 展示リニューアルの方向性

展示リニューアルに当たっては、ピースおおさかの目的を次のように再構築し、次代を担う子どもたちが、大阪と戦争の関係や身近な地域に起こった空襲の事実を通して、戦争の悲惨さ、戦争の背景・メカニズムを理解するとともに、平和を自分自身の課題として考えることができる展示を目指すことを基本とする。

- 大阪空襲の犠牲者を追悼し、平和を祈念する
- 大阪空襲を中心にして「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」を次世代に伝え、平和を願う豊かな心を育む

また、府・市において「近現代史の教育のための施設」が別途検討されていることから、これとの役割分担・連携も意識しながら、展示リニューアルを進めることとする。

2. 展示リニューアル構想

“大阪中心”に“子ども目線”で 「平和を自分自身の課題として考えられる展示」にリニューアル

(1) 展示構成

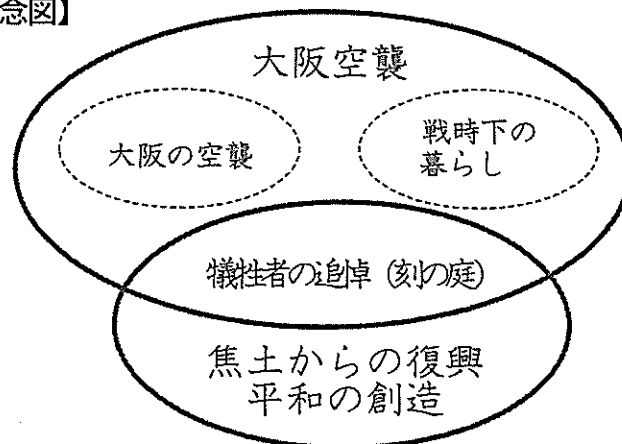
展示リニューアルに当たっては、現在の各常設展示室のテーマ(A：大阪空襲と人々の生活、B：15年戦争、C：平和の希求)にこだわらず、ゼロベースから検討する。

大きな流れとしては、

- まず、多くの入館者にとって地元の出来事である「大阪空襲」を中心に取り扱い、戦争の悲惨さを実感するとともに、空襲に至った背景や砲兵工廠、第四師団司令部などが立地し、「軍都」という側面があった当時の大阪の姿を知る。
- 次に、占領期を経て、先人たちの頑張りや焦土から復興し、今につながる大阪が形成された過程を示し、希望と努力の大切さ、平和なくして大阪の復興は成し得なかったことを知る。
- そして、「空襲」と「復興」を通して見た戦争の悲惨さ・平和の尊さを踏まえ、現代社会における平和の意味、平和の維持・創造に取り組む大阪の人々の姿を示し、未来に向けた展望を持つように整備していく。

また、戦後60周年を記念して平成17年に府民・市民の浄財で整備した「刻の庭」について、大阪空襲犠牲者の遺族の方々の平和への強い思いや願いが込められた、今を生きる我々が「平和の尊さ」に思いを致すことのできる貴重な場として、館内展示や企画事業と関係付け、認知度のさらなる向上を図る。

【展示の概念図】



このように、大阪空襲を暗く悲惨な「過去」の事実として受け止めるだけでなく、それを教訓に、「現在」に視点を移して平和の尊さ・命の大切さを実感し、そのため

に何ができるか、「未来」をどう生きるかを入館者各人が考え持ち帰ることのできる展示を目指す。

なお、館の躯体の変更は行わず、各展示室の配置は動かさない。

ただし、入館者の動線や各展示室内のレイアウト等はゼロベースから検討する。特に、「刻の庭」について、見学ルートに組み込む、あるいは無料ゾーン化できないか、検討するものとする。

(2) 狙いと展示内容

① 「大阪空襲」

【狙い】

- 空襲で大阪が焼け野原になり、多くの人が死んだり怪我をしたことを実感する。
- 当時の市井の人々の暮らし(特に子どもの日常、苛酷な体験)を知る。
- 大阪に「軍都」という側面があったことを知る。
- 太平洋戦争が国家・国土・国民そのものを標的とする国家総力戦の様相を帯びていたこと、その中で空襲という戦術が編み出されたこと、空襲が昭和初期からの日本の戦争の遂行と深く結び付いていることを知る。

【展示内容】

	大項目	中項目	小項目(展示例)
	空襲以前		太平洋戦争に至る「日本の戦争」の概観
大阪の空襲	背景	太平洋戦争(日米戦争)の概要	原因と経緯
		本土空襲の概要	なぜ無辜の民が無差別空襲に?(米軍の戦略、意図)
		大阪の空襲	なぜ大阪が空襲に遭った?(米軍の戦略、意図)
	実相	爆撃の手段	使用された航空機、構造的・機能的特色
		爆撃日時と出撃基地、爆撃内容	<ul style="list-style-type: none"> ・空襲日時 ・出撃基地(成都→マリアナ基地(サイパン、テナン、グアム))、機種、機数、場所 ・爆弾の種類・投下量 ・予告ビラ(伝単)
		爆弾の種類と威力	・爆弾、機雷、焼夷弾などのメカニズム
		被災地域の特色	<ul style="list-style-type: none"> ・府内の被災地の図示、爆撃された理由 ・被害者(被災者)数、年齢、職業 ・爆撃されたもの/されなかったもの ・*文化財も例外ではなかったことを知る
		防空の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・行政当局の民間防衛の指導実態 ・防空壕、防空頭巾、消火・消防装置など
		空襲が語る教訓	<ul style="list-style-type: none"> ・行政当局の視点 ・市井の人々、子どもの視点 ・軍部の視点
歴史的意義(何を訴えているか)		<ul style="list-style-type: none"> ・米軍戦略爆撃調査団の見解 ・他都市の空襲との違い 	
戦時	戦争と大阪	軍都大阪	軍事施設の配置図、設置年表 *砲兵工廠など大阪城周辺は別建てで詳しく

下の暮らし		大阪の産業	<ul style="list-style-type: none"> ・重化学工業への特化と紡績業の衰退 ・原料・人員の不足
	地域		<ul style="list-style-type: none"> ・戦時体制の強化(国防婦人会、統制・配給、供出) ・灯火管制、一升瓶精米 ・建物疎開 ・食料事情(献立、カロリー) ・大衆文化 ・戦意鼓舞に利用された動物、薬殺・絞殺された動物
	学校		<ul style="list-style-type: none"> ・国民学校(カリキュラム、教科書、遊びなど) ・大阪の子どもの疎開先、疎開先での生活 ・勤労働員
	応召・出征、戦地の日々		<ul style="list-style-type: none"> ・大阪出身者が多い部隊の設立、移動 ・大阪の徴兵者、戦没者の数
	外地の大阪人		<ul style="list-style-type: none"> ・満蒙開拓団の暮らし ・大阪市立興亜拓殖訓練道場跡

②「焦土からの復興/平和の創造」

【狙い】

○空襲とともに、占領と復興(その時代を生きた人々の苦勞、頑張り)も「大阪の記憶」として次世代に引き継ぐ。

○平和を築いていくために何が必要か、自分はどう行動すればよいかを考える。

【展示内容】

大項目	中項目	小項目(展示例)
焦土からの復興	終戦と大阪	<ul style="list-style-type: none"> ・終戦を大阪はどのように迎えたのか(行政当局、関係民間団体、市井の人々) ・苦しい生活(特に引揚者や戦死者遺族) ・占領下の大阪(接収された建物、闇市)
	復興と大阪	<ul style="list-style-type: none"> ・被災地の復興計画と実態 <ul style="list-style-type: none"> ・多くの労苦の実相と問題、解決(土地区画整理、交通復興) ・政府、米軍との関係 ・大阪万博までの復興の実相と教訓(青空教室、バス住宅、復興博覧会、ニュータウン) ・大衆文化の復興など、他の主要都市の復興との相異、誇れる点
大阪の復興から見た平和の発信	大阪の価値	大阪は日本の中でいかなる価値を持ち、いかなる役割を演ずべきか(戦前・戦災を通じて得られた教訓(地理的、経済的、政治的、文化的……))
	戦災を通じて得た平和の意義	
	府/市・諸団体の平和に対する理念、活動の実態	
未来を見つめて	平和への取組み	
	大阪ゆかりの人々の活動(平和維持、人道、社会発展……)	

③共通

【ハード面】

- 「子ども目線」での作り込み
 - ・説明パネルや写真の高さ、展示ケースの奥行き
 - ・ナビゲーター役のキャラクター
 - ・見るだけでなく、触れる、体感できる展示

〔例〕“入れる”防空壕、“上がれる”民家、“被れる”防空頭巾、“背負える”背囊
- 変化のある展示（写真や文字ばかりでなく、映像・音声や光を利用した立体的な表現）
 - *過度に依存しない……進化が速く、数年で陳腐化
- 頻繁な情報更新、多様な展示更新を可能にする、フレキシブルな展示システム
- 「素人」でもメンテナンスできる装置、器具
- スロープや階段の壁面、吹抜きの活用……必要性、可能性を含め今後検討

【ソフト面】

- 「子ども目線」での工夫
 - ・小学校高学年や外国人でも理解できる、具体的で簡潔な表現
 - 詳細解説は別途リーフレットや小冊子で
 - ・当時の文献は現代文に意識
 - ・子どもの「なに」「なぜ」を引き出し、考えさせる説明・解説(文)
 - ・子ども向けワークシート、ワークショップの作成、構築
 - ・子ども入館者同士の「対話」「交流」の仕掛け
- 多言語音声ガイドシステム

など

(3) 留意点

- 小中学生の平和学習利用に資するよう、教育基本法や新学習指導要領の趣旨を十分踏まえるものとする。
- 展示資料については十分な出典調査を行い、より適切な展示に努めるものとする。
- 「戦争の悲惨さを的確に伝える展示」を念頭に置きながら、感受性豊かな子どもに過大な負担をかける展示ではないか、ストーリー上不可欠なものか、専門家の意見も聞きながら検討するものとする。

3. 展示リニューアルに合わせた取組み

① 建物・設備の整備

開館以来 22 年、時間的経過とともに劣化が進み、雨漏りや冷暖房、映像機器等の故障が起こっている。ここ数年は、公的な有料展示施設として不可欠な機能維持の観点から、雨漏り箇所の修繕、設備類の更新を行っている。

将来にわたって大阪空襲犠牲者の追悼施設、また、平和学習の場として良好な状態で運営していくためには、部分的修理に止まらず、大規模改修が不可避である。そのため、展示リニューアルを契機に、建物・設備についても全般的な調査を行った上、必要な改修計画を策定し、その計画に沿って改修を進めていく必要がある。

② 事業活動の充実

府・市において、大阪城・大手前・森之宮地区を世界的な観光拠点としてインバウンドの集客を図る構想が描かれており、当館も同地区内の施設として、天守閣や大阪歴史博物館との連携、周辺の戦跡などの体験学習、修学旅行の誘致等を図る。

また、大阪空襲犠牲者を追悼し、平和を祈念するという目的を一層鮮明にすることから、府内各地に残る戦跡や追悼事業などとのネットワークを構築し、より広範で、深みのある事業展開を図り、戦争の記憶の継承に努める。

さらに、利用実態に即し「子ども目線」でリニューアルを行うことから、府・市教育委員会とより一層連携して、学校での平和教育に資する施設を目指す。